石井美樹子『マリー・アントワネットの宮廷画家：ルイーズ・ヴィジェ・ルブランの生涯』

（河出書房新社，2011 年，275 頁）

軽　部　恵　子

キーワード：ルブラン，ヴィジェ，フランス革命，マリー・アントワネット，肖像画家

本書は，ヨーロッパの名門ハプスブルク家の出身で，フランス王太子ルイ・オーギュスト（後のルイ 16 世）の妃となり，1793 年 10 月に断頭台の露と消えたマリー・アントワネットに仕えた女性宮廷画家の物語である。ルイーズ・ヴィジェ・ルブラン（Louise Vigée Le Brun，1755－1842）の名を知らない人でも，彼女が描いたマリー・アントワネットの肖像画を全く見たことがないという人はいないであろう。なぜなら，現存する王妃の肖像画の大半は，夫人の手によるものだからである。王妃の他にも，王妃のお気に入りだったポリニャック公爵夫人，ルイ 15 世の公妾デュ・バリー伯爵夫人，ルイ 16 世の末の妹エリザベト王女などを描いている。

ルブラン夫人はマリー・アントワネットと同じ年に生まれた。王妃の画家であり，良き友人でもあった夫人は民衆の怒りを集めた。夫人は革命勃発後，愛娘ジュリーとともにフランス脱出を余儀なくされた。ヨーロッパ諸国を 12 年間放浪したが，ついに故国への帰還を果した。その間，フランスでは，ルイ 16 世夫妻の処刑（1793 年），独裁者ロベスピエールの失脚と処刑（1794 年），ナポレオンの皇帝就任（1804 年）などのできごとがあった。ルブラン夫人が帰国を果した後も，ナポレオンのエルバ島への流刑（1814 年），ワーテルローの戦いとナポレオンのセント・ヘレナ島への流刑（1815 年），七月革命（1830

年）と，激動の時代が続いた。夫人が生涯を閉じた 1842 年の 6 年後，フランスでは二月革命が起きて，王制が廃止された。文字通り，絶対主義王政の終焉期を生きた人であった。

著者の石井美樹子氏は，中世英文学と演劇の専門家で，中でもルネサンスとシェイクスピア，テューダー朝に関する著作が多い。それらは，『中世劇の世界：よみがえるイギリス民衆文化』（中央公論社，1984 年），『薔薇の冠：イギリス王妃キャサリンの生涯』（朝日新聞，1993 年），『イギリス・ルネサンスの女たち：華麗なる女の時代』（中央公論社，1997 年），『イギリス中世の女たち』（大修館書店，1997 年），『ルネサンスの女王エリザベス：肖像画と権力』（朝日新聞社，2001 年）などである。一昨年には，長年の研究成果をまとめた大著『エリザベス：華麗なる孤独』（中央公論新社，2009 年）を発表した。

本書の構成は，「はじめに」と「おわりに」を除いて，計 5 章となっている。各章の見出しは，「はじめに―忘却のかなたから」，第 1 章「マリー・アントワネットの宮廷画家」，第 2 章「パリ燃ゆ」，第 3 章「イタリア流浪」，第 4 章「サンクトペテルブルクへ」，第 5 章「帰郷」，「おわりに」である。末尾には，詳細な註，ルイーズ・ヴィジェ・ルブラン略歴，マリー・アントワネットとフランス史略年表，ルイーズ・ヴィジェ・ルブランの作品一覧，そして参考文献が付けられている。本文は小説のような文体であるが，登場人物の発言は，本人の書簡またはその他の史料を元にしたことがわかる。どこからどこまでが史実に裏付けられ，どこからどこまでが作者の想像力なのか，読み解く試みも楽しいであろう。

ルイーズ・ヴィジェが絵を描き始めたのは，6 歳で修道院に預けられた頃からであったという（p.14）。7－8 歳の頃，頭の禿げた男性のスケッチを画家である父に見せたところ，父は喜んだが，ルイーズが家族と暮らすようになって間もない頃，父は突然亡くなった（p.15）。ルイーズは父から絵の手ほどきを受けていたが，父の死後は王立アカデミー会員となっている父の友人たちから指導を得ることができた（p.16）。

モデルを実物より美しく描くルイーズ・ヴィジェは若くして肖像画家とし

て成功する。だが，母の再婚相手とうまくいかなかったこともあり，家を出るために画商のジャン＝バチスト・ピエール・ルブラン（Jean-Batiste Pierre LeBrun, 1748－1813）と結婚した（p.24）。彼のギャラリーには古典派の巨匠の作品が多数並んでいたが，ルイーズが模写できるようにと惜しげもなく作品を貸してくれたという（同）。意外だったのは，フェルメールを発見したのがジャン＝バチストだったことである（p.25）。妻によると，カネにはだらしなかったようだが，画商として古典派の作品に対する鑑識眼はたしかで，名画を買い付けるためしばしば外国に赴いていた（同）。そればかりでなく，20年の研究成果を『画家たちのギャラリー』と題した全3巻の本にまとめ，1792年から1796年にかけて出版した。フェルメールの太陽光線の使い方を高く評価したという（pp.25-26）。

ルイーズ・ヴィジェは若い頃から美人で有名だった。麦わら帽子を被った自画像が本書の装丁に利用されているが，決して掛値はなかったようである。娘ジュリーを胸に抱いた自画像でも，母子共々が愛らしさと美しさに溢れている（p.33）。だが，彼女は戦略的に物事を考えられる人物でもあった。1783年に女性会員が逝去した際，ルブラン夫人はアカデミー会員に推薦された。会員の女性は4名と枠が決められていた（p.34）が，彼女はアカデミー入りを確実にするため，3年足らずの間に歴史画を5点作成したという（p.35）。ルイ16世妃のお気に入りであっても，周到な地ならしを怠らなかったのだろう。

ルイーズ・ヴィジェ・ルブランが王妃と出会った経緯は，王妃の肖像画の模写を1776年と1778年にヴェルサイユ宮殿から依頼されたからであった。周知のとおり，王妃は結婚から8年目にようやく初めての子，マリー・テレーズ王女を出産したが，23歳の母の肌は輝くばかりに透明であったという（p.37）。以来，「シミーズ・ドレス姿のマリー・アントワネット王妃」，「薔薇を持つマリー・アントワネット王妃」など，王妃の肖像画をルブラン夫人が次々と制作する（p.40）。

女性肖像画家ルイーズ・ヴィジェ・ルブランがパリを脱出するくだりは，読んでいても緊張する。騒然としたパリから逃れるため，1789年10月6日の

真夜中に計画は決行された。夫人は大判のスカーフで顔を隠し，農婦に身をやつして，娘を連れて辻馬車に乗ってリヨンへ出，イタリアに逃れた（pp.90-91）。ルイ 16 世一家はスウェーデン人伯爵フェルセンの手引きで 1792 年にパリを脱出した後，途中でのんびりと休憩をとっていたが，他の貴族たちはどのように脱出したのか。暴動あるいは革命に対する危機感は貴族たちの間でどのように認識されていたのか。興味が湧いてくる。

本書を読んで強く感じる点は，昔から絵画は権力者のプロパガンダによく貢献してきたという事実である。ルイーズ・ヴィジェ・ルブランと同時期に活躍した画家に，ナポレオンの戴冠などを描いたジャック＝ルイ・ダヴィッド（Jacques-Louis David，1748－1825）がいるが，ルブラン夫人とて例外ではなかった。有名な「首飾り事件」で傷ついた王妃マリー・アントワネットの名誉を回復するため，起用されたという（p.49）。その作品は，「書を読むマリー・アントワネット王妃」（個人蔵）と，「マリー・アントワネット王妃と子どもたち」（ストックホルム国立美術館蔵）であった（pp.40-49）。後者で，王妃は首飾りを付けず，国母としての面を強調するため，3 人の子どもたちとともに描かれた。

ここで，3 人の子どもたちの過酷な運命について触れたい。マリー・テレーズ王女は，絵画の中でママンに甘えて寄りかかっているが，革命勃発後，父，母，国王一家と行動を共にしていた信心深い叔母エリザベト，弟ルイ・シャルルと，次々に家族を失った。1799 年，いとこのルイ・アントワーヌ・ダルトワ（ルイ 16 世の末弟で，後のシャルル 10 世の子）と結婚した。だが，1830 年の七月革命で，ブルボン家はオルレアン家に王位を奪われた。さらに，1848 年の二月革命でフランス王制は終焉した（詳細は，ヴェルサイユ宮殿公式ホームページ，「マダム・ロワイヤル」http://jp.chateauversailles.fr/jp/history/court-people/louis-xvi-time/madame-royaleを参照）。長男の王太子ルイ・ジョゼフは，病弱で 1789 年 7 月のバスティーユ襲撃の前月に死去した。兄の死で王太子となった次男のルイ・シャルルは 1785 年に生まれたが，絵画の中では母の腕に抱かれる赤子であった。彼は，1793 年 1 月に父王が処刑された後，

母たちから引き離され，1 人タンプル塔に閉じこめられたあげく，1795 年に死亡する。父の処刑後，ルイ 17 世に即位としてみなされたため，幼い国王の心臓はパリ郊外にあるブルボン家の墓所サン・ドニ大聖堂（http://saint-denis.monuments-nationaux.fr/）の地下納骨堂に納められている（詳細は，ヴェルサイユ宮殿公式ホームページ，「ルイ 17 世」http://jp.chateauversailles.fr/jp/history/court-people/louis-xvi-time/the-dauphin-louis-xvii-を参照）。「マリー・アントワネット王妃と子どもたち」は 1786－1787 年に制作されたが，モデルたちも制作者も，わずか 2 年後に始まる革命で，自分たちの運命が大きく変転することなど思いも寄らなかったであろう。そう考えると，肖像画の中で人工的な笑みを浮かべる王家の子どもたちは，まことに哀れである。

本書は，ルブラン夫人の生涯を通じて，当時のフランスにおける女性の経済的地位も描いている。あの時代，女性が両親から自立するには，結婚しかなかった。それは同時に，自分の財産を夫に管理されることでもあった。それでも，ルイーズは実家の姓であるヴィジェを夫の姓であるルブランの上に重ねる，独立心旺盛な女性であったという（pp.9-10）。

ヨーロッパを放浪する際，彼女は絵画を描くことで必死に生計を立てたが，夫は妻を経済的に支援しなかったようである。1794 年に離婚が成立した元夫が，2 人の間の娘ジュリーをルイーズがサンクトペテルブルクに置き去りにしたと非難したことに対し，ルイーズが 1801 年 1 月 29 日付けの手紙で次のように抗議している。

> あなたの仕打ちとわたしが娘にしたことを比較して下さい。わたしは持つものすべてをあなたに渡して亡命しました。わたしと娘が生きていくために，また娘を教育するために，家庭教師や召使いに賃金を払うために，馬車，料理人，家政にかかる費用を払うために，絶えず移動する費用のために，わたしは懸命に働かなくてはなりませんでした。・・・・あなたはお金を貯蓄する代わりに，結局はあなたを騙す女性たちを囲うの

に使いました。賭け事にお金を湯水のごとく使い，多くの負債を負いました（p.209）。

ルイーズの夫に対する怒りの文面を読むと，少々古いが「髪結いの亭主」という言葉が頭に浮かんだ。

本書末尾に記された参考文献は，英語文献が圧倒的に多かった。評者は，フランス語文献のルブラン夫人研究に対する著者の評価を聞いてみたかった。また，著者は，フランス王位継承者を「皇太子」と表記しているが，一般的には「王太子」と呼ばれる。細かいところであるが，ナポレオンが自らを王の上であると示すために皇帝に即位したことを考えると，正確な記述が望まれる。

最後に，本書は，18 世紀末から 19 世紀初頭のフランス革命とナポレオン戦争，ひいてはヨーロッパの社会・文化の研究に貴重な側面を開いたといえよう。表紙のルブラン夫人の自画像は，ロンドンのナショナル・ギャラリーが所蔵する。同ギャラリーには，他にも世界的な名画が多数展示されている（詳細は，書評「桜井武『ロンドンの美術館』（平凡社，2008 年，260 頁）」桃山学院大学『人間科学』第 35 号（2008 年 7 月）pp.351-362 を参照）。ロンドンへ出かける予定のある人は，ぜひ立ち寄ってほしい。

＜参考＞

・エヴリーヌ・ルヴェ著，塚本哲也監修，遠藤ゆかり訳『王妃マリー・アントワネット』創元社 2001 年
・安井裕雄「販売目録を通して見たルブラン夫妻：画商ルブランのコレクションが画家ヴィジェ・ルブランの画業に与えた影響について」『マリー・アントワネットの画家　ヴィジェ・ルブラン　華麗なる宮廷を描いた女性画家たち』（展覧会図録）三菱一号館美術館／日経新聞社，2011 年。
・ヴェルサイユ宮殿公式ホームページ「ヴェルサイユ宮殿の移り変わり　宮廷生活」

http://jp.chateauversailles.fr/jp/history-

・ＮＨＫ「日曜美術館　マリー＝アントワネットと二人の画家　ヴィジェとダヴィッド」（初回放送 2011 年 4 月 17 日）

http://www.nhk.or.jp/nichibi/weekly/2011/0417/index.html

・そごう美術館（横浜）「マリー・アントワネット物語展」（2012 年 9 月 15 日－11 月 18 日開催）

http://www 2.sogo-gogo.com/common/museum/archives/12/0915_marie/index.html

・三菱一号館美術館「マリー＝アントワネットの画家　ヴィジェ・ルブラン展　華麗なる宮廷を描いた女性画家たち」（2011 年 3 月 1 日－5 月 8 日開催）

http://mimt.jp/vigee/

・メゾン・ミュゼ・ド・フランス（ＭＭＦ）「学芸員安井氏が語るルブラン夫妻の実像」

http://www.museesdefrance.org/museum/special/backnumber/1105/special 03-02.html

・Basilique Cathedral de Saint-Denis

http://saint-denis.monuments-nationaux.fr/

・The Metropolitan Museum of Art, “The Legacy of Jacques-Louis David (1748-1825)”

http://www.metmuseum.org/toah/hd/jldv/hd_jldv.htm